

ごあいさつ 2
経緯報告 3
ご寄付御礼 5
支援報告	
① 全国の支援団体へ感染予防資材を提供 7
② フェイス・トゥ・フェイスの相談事業を諦めないための機材購入費提供 9
③ 大家さんも安心できる相談員がいる支援付き住宅の持続的提供 11
全国10都市パートナー団体紹介	
NPO法人 コミュニティワーク研究実践センター 15
NPO法人 ワンファミリー仙台 17
認定NPO法人 生活困窮・ホームレス自立支援 ガンバの会 19
NPO法人 サマリア 21
認定NPO法人 自立生活サポートセンター・もやい 23
NPO法人 わっぱの会 25
NPO法人 釜ヶ崎支援機構 27
一般社団法人 近畿パーソナルサポート協会 29
NPO法人 岡山・ホームレス支援きずな 31
認定NPO法人 抱樸 33

長い長いトンネルの中を歩いてきました。「出口」を未だ見出さずに一年が経ちました。しかし、闇が深ければ深いほど人は「光」を見出すのだと、今回のプロジェクトを始動させることで確信することが出来ました。

感染拡大の中、困窮者が増えることは確実でした。「何をすべきか」との自問が繰り返され、私たちは「コロナ緊急一家や仕事を失う人をひとりしにしない支援」と題したクラウドファンディングの開始も決断しました。

一億円の目標に「無謀」との声も聴かれましたが、集まり始めた「光」は最終的に10289人という「光輝」となりました。集められた寄付を用い全国10都市で170室を超える支援付住宅を確保することが出来ました。コロナと言う危機の中で消されることがない「光」を私たちは見出したのです。

このプロジェクトは、今、困窮状況にある人を支えと共に、今後のあるべき社会を模索するものでした。全国には800万戸以上の空き家があるとされています。にも拘わらず家を失う人が現れる。これはどういうことか。

「病気により家まで失う社会」であってはならない。そうであれば「新しい社会モデル」を提示しなければ。これが今回のプロジェクトのもう一つの意味です。

クラウドファンディングを中心に、一億を超える大きな寄付を頂きました。驚きと感激が今もあります。しかし、困窮者全体からすると「僅か」と言わざるを得ません。170室確保できた住宅が10年間で5回転したとしても利用者総数は1000人も満たないのが現実です。

しかし、「この一歩」の意味は大きいと感じています。空き家利用、サブリース、支援付き・・・。「新しい社会モデル」のために必要な要素が今回のプロジェクトで明らかになりました。これを元にNPO法人抱樸は「あるべき社会のかたち」を全国の団体と共に創造したいと思えます。

改めまして今回のプロジェクトに寄付でご声援頂いた方々に心より感謝を申し上げます。勇気と希望をいただきました。コロナ禍は続いています。困窮状態に追い込まれる人々は今後急増すると思われます。どうぞNPO法人抱樸の活動をこれからも応援くださいますように心からお願い申し上げます。



NPO法人 抱樸 理事長

奥田知志

経緯報告

2020年4月、コロナ感染拡大を受けて、1回目の緊急事態宣言が発令されました。経済が大打撃を受ける中、そのシワ寄せが最もあらわれるのは、非正規雇用の人や低所得の人など、社会的に弱い立場にいる人たちです。このような人たちからまず仕事を失い、住まいを失い、人とのつながりを失い、いのちの危機に直面することになります。過去20年あまりの間に、アジア通貨危機とリーマンショックという2度の不況の波を経験し、その影響で自殺者とホームレスが増加するという大変厳しい状況が起こりました。その過去の経験から、わたしたちNPO法人抱樸は、次の3つの支援事業を全国の仲間と取り組むことにしました。

資金

事業は寄付金でおこなおうと、2020年4月28日、この支援事業のために全国へ向けて協力の呼びかけを開始しました。記者発表をWEB動画番組サイトのドキュメントで行ない、READYFORが運営するプラットフォームでクラウドファンディングをスタートさせました。早々に、村上財団からマッチング寄付をご提案いただき、通常はクラウドファンディング終了後に入金を受けるところ、期間中に資金提供を受けることができました。そのお陰で、早い時点で支援事業に着手することができました。

広報

この支援事業をたくさんの方に知っていただくための広報活動にも力を入れました。READYFORのプロジェクトページを何度も更新し、団体のサイト上にも専用のページを設置しました。また、各種SNSを活用し、情報発信を行いました。5月からは、毎週2回のYouTubeでの対談配信を行いました。毎回のゲストの皆様からは、大変貴重なお話を頂戴しました。



「ぬくもりを抱いて～Amazing Grace～」

<https://www.youtube.com/watch?v=uHEBkdWJpw>

すまいや仕事を失う人をひとりにしない
必要の人に必要支援が届く状態を全国に展開するためには**1億円**が必要です。

0 100,000,000

#家から支えよう すまいや仕事を失う人をひとりにしない社会へ
寄付が2倍になって届く 全国の仲間と共にステイホームできない人へホームを

応援

ありがたい応援の形も様々ありました。この広報活動で抱樸を知って下さった歌手の中川奈美さんが、この支援事業を応援しようと仲間呼びかけ歌を届けてくださいました。また、地元で旧くから抱樸を応援して下さっている書道家の栗原光峯さんは、音楽家の谷本仰さんとLIVEセッションをおこない、そこで描かれた書で応援するチャリティイベントを開催してくださいました。



谷本仰 × 栗原光峯 LIVEセッション

<https://www.youtube.com/watch?v=tlh-ZJkcmE>

応援メッセージ

READYFORのプロジェクトページでは、支援者の方からの応援メッセージが投稿されます。その一部をご紹介します。皆様のあたたかいメッセージ、本当に力になりました。ありがとうございました。

このような機会を与えて下さったことに心より感謝申し上げます。家にいるままでなたかのお役に立てるのは、望外の喜びです。奥田さん、スタッフのみなさま、ほんとうにありがとうございます。

Twitterで知った。本来なら国がやるべきこと、奥田様をはじめ皆さんに敬意を表します。機会があればお手伝いします。

国から特別給付金が出るなら、職や住まいを失いまさに今困窮している人にこそ優先して手渡されるべき、とかねがね考えていました。制度の壁により何故かそうならない現状に怒りを感じます。そのような弱者と呼ばれる方々を支援してくださっているこちらのプロジェクトを知り、せめて一助になればと寄付させていただきました。応援しています。

本当にわずかだが、寄付すると2倍になる、という仕組みに背中を押され、私自身が励まされたような気持ち。このようなシンプルな操作で支援を届けられる仕組みを用意して下さったことに感謝。少しでも支援できる自分になれるよう、日々を暮らして行こうと思います。

全国の活動団体と連帯するとの取り組みに賛同して初めてクラウドファンディングにトライしました。これからも応援します。

社会を変えるためのわたしの一歩です。

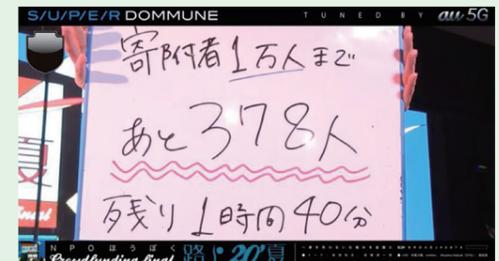
クラウドファンディングの終了

クラウドファンディングは3ヶ月を駆け抜け、2020年7月27日に最終日を迎えました。前夜、ほうぼくチャンネルでの配信中に目標の1億円を達成し、リアルタイムで全国の皆さんと喜びを分かち合いました。最終日は再びドキュメントで5時間番組を用意して頂き、高橋源一郎さんと奥田理事長の対談や、様々なミュージシャンによるご声援のラ

イブでカウントダウンを行いました。その終盤、寄付者が1万人を超えました。誰もがコロナ禍で苦しい中、見知らぬ「もっと苦しい人」へ心を寄せる方が、こんなにも居る…そのこと自体が大きな「希望」として、我々そして寄付で支援事業への参加を表明してくださった方々みんなを包み込みました。

事業報告

この報告書にて事業の報告をしていきますが、「家や仕事を失う人をひとりにしない支援」はまだまだ続いていきます。どうか引き続きご声援を向けて頂けますよう、宜しくお願い致します。



ご寄付御礼

クラウドファンディング報告

寄付金控除型 #社会にいいこと #まちづくり #医療・福祉 #人権 #貧困 #寄付金控除型 #新型コロナウイルス

コロナ緊急 | 家や仕事を失う人をひとりにしない支援

認定NPO法人抱樸-ほうぼく

寄付総額 **115,798,000円**
目標金額 100,000,000円

寄付者数 10,289人 募集終了日 2020年7月27日

プロジェクトは成立しました!

感謝 ここから支援を前に

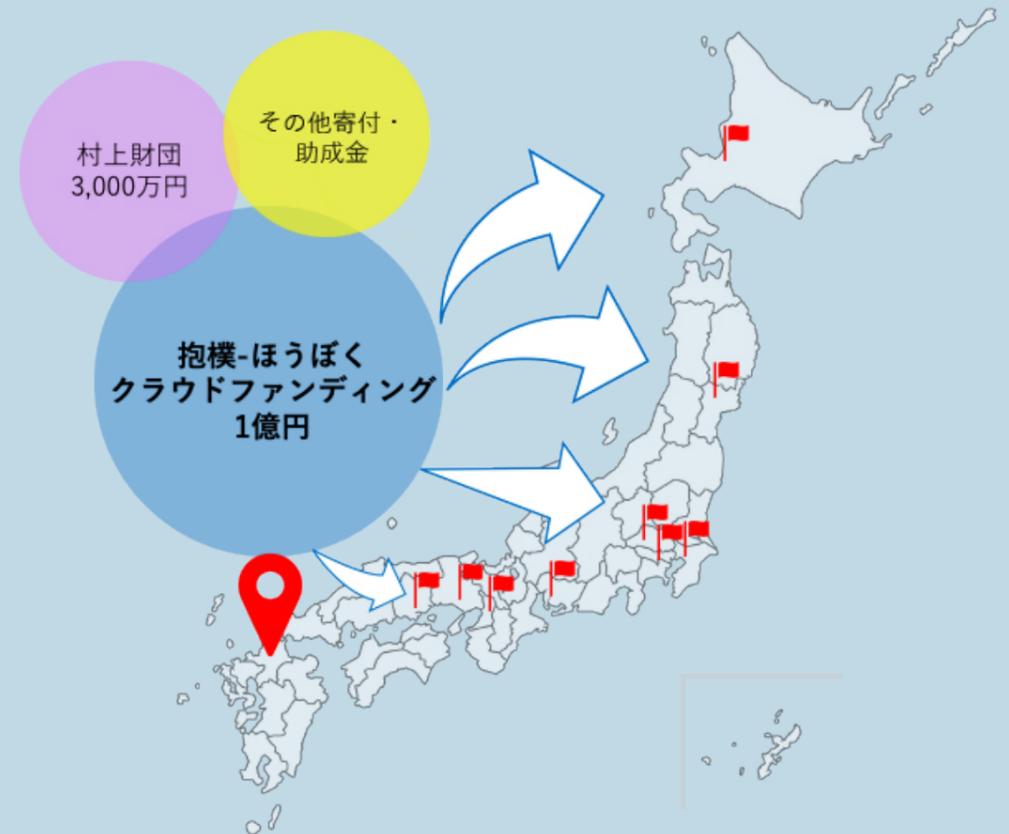
#家から支えよう コロナ関連死をくい止めるため 支援付き住宅を提供します

家を失わない仕組みを全国へ

READYFOR寄付型クラウドファンディング
実施 2020年4月28日～7月27日



1万人以上の寄付者に支えられて
目標達成しました。
本当にありがとうございます!



クラウドファンディングへのチャレンジにより、事業への共感が広がり、他の様々な形でも抱樸に資金を託していただきました。クラウドファンディングの会計報告は、ご参加の皆様へはリターンとしてお送りしました。その他、抱樸の活動報告（会計報告含む）につきましては、年次報告書にて、正会員、ほうぼくサポ-

ーター、賛助会員の皆様へお届けいたします。コロナによる影響はまだまだ続いており、一旦の事業報告を致しますが、ご寄付については更に「家や仕事を失う人をひとりにしない」ために必要な活動に役立てていきます。共に助け合う社会の仕組みづくりに向けての多くのご寄付に、改めて感謝申し上げます。



マスク
132,500 枚



消毒用アルコール
160 本

👏 全国185団体へ提供済み 👏

経過報告



このコロナ禍で、2020年3月以降「対人援助」の現場では、密を避けるために今までのような相談や日常生活支援が制限されてしまっています。特に「困窮孤立者支援」は「ひとりにしない」のがテーマですから、一部コミュニケーションを電話や手紙に切り替えながらも、感染対策をしながら極力「対面」を実現できるように現場は工夫しています。

そこに必要になってくるのがマスクなどの衛生用品。4月末にクラウドファンディングを開始し、5月9日には1500万円を寄せて頂きました。通常クラウドファンディングの寄付金が手元に来るのは、全てが



終了してからののですが、マッチング寄付を行なって下さっている村上財団様が、この時点で「すぐ1500万円を送ります」と振り込んで下さいました。さらに、入手が難しい時期だったにも関わらず、サージカルマスクの手配もして下さいました。お陰様で、2020年6月、迅速に全国105団体へマスク52,500枚を提供することが出来ました。

さらに、2回目の緊急事態宣言が出たタイミングで、第2次の衛生用品の発送を行いました。今回は、全国80団体へ、マスク80,000枚と消毒用アルコールをセットにして提供しました。



発送作業には、コロナ禍で仕事がなくなり困っていた就労継続支援B型事業所の方々が携わってくれたため、雇用の創出にもつながりました。

お礼メッセージ



このたびは衛生用品をお送りいただき、誠にありがとうございます。当法人は、被疑者被告人段階での更生支援活動を行うNPO法人です。貴法人同様、お金も物も何も持っていない状況からの支援ですので、不織布マスク、消毒用アルコールをありがたく活用させていただきます。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

本日、たくさんのマスクと噴霧器、アルコール消毒薬を受け取りました。当会のホームレス支援委員会、定着支援センターでの支援にあたって、活用させていただきます。本当にありがとうございます。

来所される方に対して、マスクの着用をお願いをしたいにも関わらず、在庫不足のために、こちらからお願いができなかった経緯もあり、この度の送付について、大変ありがたく感じているところです。早速玄関にいただいたマスクを設置し、来所の方にマスク着用をお願いし、かつ、必要な方にはお持ち帰りいただくことができるようになりました。

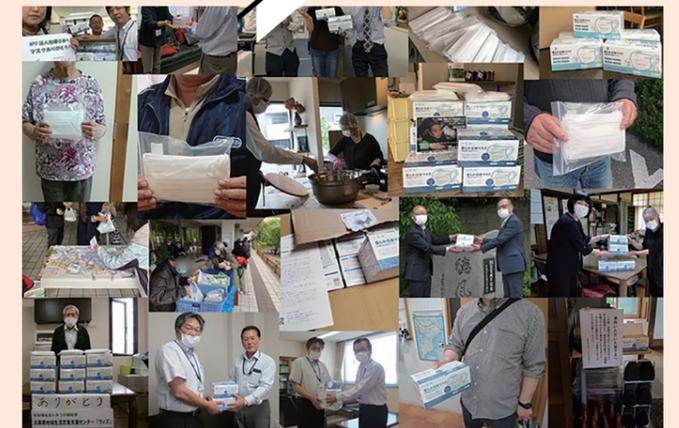
マスクのご支援ありがとうございます。コロナ感染対策のためカレーライスから変更し、お弁当とお茶等のセットとマスクを炊き出しでお配りしました。



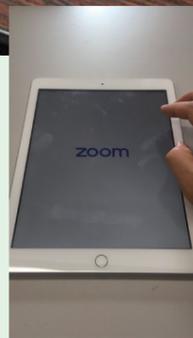
マスクを通して、人と人との関わりの温かさや優しさに触れて、元気をいただきました。まだまだ先の見えない状況ですが安心と安全の中で、これからも活動を頑張っていきたいと思えます。

お世話になっております。本日、マスクとアルコール並びにノータッチディスペンサーのセットが2箱送られてきました。開封する際、感謝が胸が熱くなりました。当法人は、月2回「ホープ食堂」を始め、無償で、コロナ禍で貧困に陥っているひとり親家庭や貧困者に持ち帰り弁当の配布を行っています。支えている私達が、さらに社会に支えられていることを実感して、一層ボランティアに励んでいく所存であります。たくさんの衛生用品、有効に活用したいと思います。ありがとうございました。

私たちの活動する神奈川県においては、本日夜にも緊急事態宣言が解除する方向となっておりますが、依然として感染リスクは高い地域の一つでもあります。対人支援の活動において、リスクを回避するためにマスクは必要不可欠なものであり、今回ご支援いただいたマスクは大変ありがたく感じております。



全国34団体へ
環境整備資金を提供



支援していただいた資金で以下のような物品を購入することができました

パソコン(デスクトップ・ノート)

タブレット・タブレットPC

LANケーブル等関連部品

スマホ・スピーカーフォン、イヤホン

ウェブカメラ、スピーカー等

ホームプロジェクター



経過報告

相談者と相談員は、通常ならば顔をあわせて相談をします。しかし、「新しい生活様式」の時代では、「濃厚接触」となってしまう。また、ご本人を支えるためには関係機関との密な連携、打合せが必要ですが、一堂に会するというのも困難となりました。

ならばインターネットで、となると思いますが、相談をする側の方々に機材や設備が無い、支援する側も支援活動の資金確保で手一杯な中、環境が整っていないということがあります。また、極力外出や通勤を避けようとする世の中で、リモート環境の整備にも苦労する

団体が多くあります。そのため、パソコンやカメラ等のリモート環境の整備、タブレット等の端末購入代金に充ててもらうため、全国34団体へ環境整備の資金を提供させていただきました。

お礼メッセージ

パソコンの更新は当法人の課題だったのですが、小さなNPOでは先立つものにも苦労する状態で、まずは古いWindows7機2台にWindows10をインストールして対応していました。しかし、WEB会議がコロナ禍で主流となるとともに、映像の送受信が必要となり、いささか心もとない状態でした。今般、ご支援をいただいた資金を元にPC2台を最新型に更新するとともに、相談支援員の携帯電話もスマートフォンに更新しました。特に携帯とPCが相談支援員に好評で、出張相談に対する対応も迅速にできるようになりました。



この度はIT機器の助成金により、PCを購入できましたこと、心より御礼申し上げます。感謝して大切に使用させていただきます

機材の購入により、会議開催の幅が広がり、必要に応じて臨機応変に対応できるようになりました。本当にありがとうございました。





皆様からのご支援で「支援付き住宅」を全国10都市で展開する目標を実現する事ができました。そして、各パートナー法人の協力と努力により、生活の基盤である住まいをスピーディに確保する事が出来ました。本当にありがとうございました。

※入居可能 = 住宅確保をして室内改修や家財什器を用意して、すぐに入居いただける部屋

パートナー法人	エリア	覚書締結日	物件確保	入居可能	利用者
1 NPO法人 コミュニティワーク研究実践センター	北海道	6月15日	10	10	3
2 NPO法人ワンファミリー仙台	宮城	7月13日	15	15	18
3 認定NPO法人 生活困窮・ホームレス自立支援ガンバの会	千葉	6月16日	10	10	10
4 NPO法人サマリア	埼玉	9月8日	18	15	18
5 認定NPO法人 自立生活サポートセンター・もやい	東京	7月20日	5	5	5
6 NPO法人わっぱの会	愛知	9月10日	18	18	10
7 NPO法人釜ヶ崎支援機構	大阪	6月17日	22	22	16
8 一般社団法人近畿パーソナルサポート協会	兵庫	7月14日	29	17	10
9 NPO法人 岡山・ホームレス支援きずな	岡山	9月10日	20		
10 認定NPO法人 抱樸	福岡		25	25	20

進捗数字は3月31日時点のものを反映しています



今回の支援付き住宅は、コロナ禍を乗り越えるためだけでなく、次に何が起きてもしのちと生活の拠点だけは失わない社会をつくって行くための仕組化です。

課題

- ・全国800万戸の空家が存在
- ・大家さんたちは空家を貸したがっている
- ・一方で、高齢者・低所得者など住宅確保要配慮者には貸しづらい

解決

- ・大家さんから支援団体が一括で借上げる（複数戸借りる事で賃料を考慮して頂く）
- ・生活保護の最低基準住宅扶助の金額で支援団体が貸す
- ・賃料差額で相談員の雇用や支援活動費として継続性を担保する
- ・就労や生活相談をしながら次のステップまでサポートする



空家を有効利用して生活基盤を整えることと、継続的かつ効果的な自立支援を提供することを組み合わせ、仕組化することで、自立のための息の長い支援が可能となります。

振り返り

皆様からのご支援で「支援付き住宅」を全国10都市で展開する事、空き家を活用し継続的な支援可能な仕組化へのチャレンジをする事を各パートナー団体に説明しご理解して頂き、今回の事業を進めていきました。しかし、実際に事業を進める中で、難しい事・悩む事・困難な事もたくさんありました。

例えば、部屋を確保する際、支援団体の名前を出すと断られるケースもあり、なかなか物件確保が進まない。ようやく確保しても、改修が必要でどうしても入居可能になるまでに時間を要してしまう。

また、エリアによっては、サブリースの差額がない或いは少ない団体もありますし、部屋を支援団体が契約する際、連帯保証人を求められた場合は、団体の理事長が

なるわけです。部屋の確保が多い団体の中には、結果的に2,000万以上の連帯保証の契約をしているケースもありました。

そして、岡山においては住宅の確保はできましたが、一部の住民からの反対の声もあり、3月末には開設には至っていませんでした。しかし、ご理解して頂けるように説明を重ねることで、ようやく一定の理解を得ることができ、5月時点でようやく開設を待つのみという段階までこぎつけました。

クラウドファンディングスタートから1年経過し、事業を進めてきた結果、ご寄付をして頂いた皆様や不動産会社・大家さん・パートナー団体など、多くの方々のご協力で、想定より多くの支援付き住宅が確保できました。そして、コロナで困っている方々

への素早い支援が可能となりました。すでに支援付き住宅を卒業し、自立した方々もいらっしゃいます。

確保した部屋数は172室ですが、5年後10年後には、この支援付き住宅を通して卒業される方は、5倍10倍となっているはず（そうならない社会になっている事を願っていますが…）。

これからもコロナ禍で気づかされた社会の脆弱性を乗り越え、“誰も取り残さない社会”を共に生きたいと願っています。本当にありがとうございました。



パートナー団体紹介

NPO法人 コミュニティワーク研究実践センター

NPO法人 ワンファミリー仙台

認定NPO法人 生活困窮・ホームレス自立支援 ガンバの会

NPO法人 サマリア

認定NPO法人 自立生活サポートセンター・もやい

NPO法人 わっぱの会

NPO法人 釜ヶ崎支援機構

一般社団法人 近畿パーソナルサポート協会

NPO法人 岡山・ホームレス支援きずな

認定NPO法人 抱樸



支援付き住宅 札幌市の状況

住宅確保数	入居可能数	支援者数
10室	10室	3名

経過報告

札幌市では1990年代後半から、ボランティア団体によるホームレス支援が開始され、2000年代に入り、ボランティア団体によるシェルターの設置や生活支援住宅事業が開始されました。現在は札幌市に2000戸以上生活支援住宅があるのではないかとされていますが、その正確な数については把握されていません。コミュニティワーク研究実践センターでは、2015年7月から札幌市内豊平区・白石区・中央区に生活支援付き住宅を設置。2020年4月の段階では借り上げていた23部屋全てが満床となり、新たな受け入れが難しい状況でありました。そのため団体独自でク

ラウドファンディングを開始すると共に、本プロジェクトのパートナー団体として10部屋確保し、受け入れを開始しました。私どもの法人では、住まいを失った方の相談を受けた時には、一旦シェルターに入所して頂きその後、居宅場所を設置する支援を行います。コロナ禍の中で、就職先が中々みつからず、入居された方や、長期間に渡り家族関係が非常に悪く、コロナの影響で自宅で過ごす時間が多くなり、家族関係が破綻し避難を必要とした方を受け入れなども行いました。コロナの影響が様々なところに表出しているそんな印象を持っています。

50代の男性は、本州の工場に働いていましたがコロナの影響で失職。実家に戻り、仕事を探しましたが中々みつかりませんでした。年金で生活していた母親と同居していましたが、母親をはじめ親族からこれ以上、本人の面倒をみるのは難しいと言われ、自宅を出てホームレス状態となり相談につながりました。現在は病院に通院しながら、ハローワークに通いながら正社員を目指し就職活動を行っています。

入居者の声

家族との関係が20年以上悪く、コロナになりより自宅で家族と過ごす時間が多くなり、苦しんでいました。心臓を悪くし入院した際、病院のスタッフへ自宅には戻りたくないと言われ、コミュニティワーク研究実践センターの生活支援付き住宅を紹介してもらいました。現在、暮らしている部屋が全国の沢山の方の寄付で準備された部屋だと知り本当に感謝しています。20年以上引きこもっていたため、まだまだ社会に出ることに不安はありますが、スタッフの方と相談をしながらこれからについてゆっくり考えていきたいと思っています。本当にありがとうございました。



理事長 穴澤義晴

御礼のメッセージ

北海道のパートナー団体として部屋を準備し、受け入れを開始してから約9カ月が経過しました。私どもの法人では札幌市内に10部屋準備し、現在3名の方が安心・安全な住まいを手に入れ暮らされています。4月1日からは30代の男性が入居する予定になっています。コロナ禍により誰しもが苦しい状況の中で、全国で10000人を超す方々からの応援があったことは、私たちコミュニティワークも本当に励まされました。3月末で一区切りですが、皆様からご支援いただき準備させて頂いたお部屋を活用しながら、ひとりでも多くの方が安心・安全な暮らしを回復できるよう活動していきます。今回ご支援頂きました皆様・抱樸の皆様、本当にありがとうございました。

団体の活動紹介



入居者へお弁当を配布しています



地域の除雪や施設の除雪を仕事づくりとして取り組んでいます。



月形町での農業体験



若者向け生活支援付き住宅



札幌中心部での朝回り

生活支援付き住宅の消防訓練

2008年より就労に困難を抱える若者の働く体験の場(収入を得る場)作りから活動を始めました。取り組みのなかで、彼らが就労に結びつかない原因は彼らだけの課題ではなく、地域コミュニティ(地縁だけではなく、さまざまな地域活動)をいかに再生するかが課題であるとの認識を強めていきました。取り組みを仕事・生活・活動の幅広い範囲でコミュニティワークの先進的実践を行っていく団体として2011年2月にNPO法人として活動を開始しました。「困りごとをひとつごとではなくみんなのこごとへ」を合言葉にこれまで活動を行い、今年で10年を迎えました。社会制度や地域の資源、人々の力を借りながらともに助け合いのできる暮らしの創造(コミュニティワーク)を目指しています。現在、私たちの法人では、孤立しがちな住まい・仕事・暮らしのなかで、場とつながり、コミュニティが生まれ、幸せに暮らせることを願い、北海道の札幌市、空知管内で下記のような活動を行っています。

■札幌地区

1. 札幌市ホームレス相談支援センター「コミュニティハウスれおん」分室の運営
2. 生活支援付き住宅の運営(保証人なし、即日入居可能な、生活・就労支援付き住宅)
3. 市民活動プラザ星園の管理運営
4. 子育て支援、親育ち支援事業の実施

■空知地区

1. 岩見沢市生活サポートセンターりんくの運営(生活困窮者自立相談支援機関)
2. そらち生活サポートセンターの運営(生活困窮者自立相談支援機関)

これまでの活動を通じて、たくさんの方々にお会いしてきました。「仕事」や「住まい」だけでなく、人とのつながりを失い、誰にも相談できず、孤立を余儀なくされてきた人々です。家族を持つこと・安定した住まいを持つこと・安定したお仕事に就くことを希望していますが、将来の見通しが立たず、一人では解決不能な状況に、「夢」や「自己実現」を諦めている人も多いです。誰もが平等に「夢」や「自己実現」に向かえ、人生を心豊に暮らすことができるよう、日々、お一人おひとりに寄り添いながら活動を続けています。「安心した暮らし」の先にこそ、それぞれの幸福追求が保障されると考えています。

活動の詳細はこちら



Facebook



YouTube チャンネルはこちら!



YouTube



支援付き住宅 仙台の状況

住宅確保数	入居可能数	支援者数
15室	15室	18名

経過報告

これまでも、当法人は支援付き住宅を運営してきました。運営費用は入居者からいただく利用料でまかなっていますが、いわゆる初期費用(具体的にはアパートを借りときの敷金、礼金、不動産仲介手数料、家財道具の購入費用といったもの)はどこからも出ません。他事業の収益が上がらなければなかなか新規開設はできない状況でした。それが、今回クラウドファンディングで得た助成金によって新たに15部屋を開設し、居所を失った方を受け入れられるようになりました。物件としては、仙台市内の単身者向け賃貸アパートを5か所、1棟あたり数室ずつ借り上げました。1人暮らしでアパートに住むのにこと足りる家財も、今回のクラウドファンディングの助成金で買わせていただきました。ふとんセットと防災カーテン、冷蔵庫、洗濯機、電子レンジ、炊飯器、IHのクッキングヒーターとIH対応の調理器具一式や食器一式などを

準備しました。入居されている方へは、平日1日1回必ず訪問による安否確認をしています。また、緊急の電話は24時間365日いつでも当番の職員に繋がる体制を組んでおり、体調のことや、住まいの周りで起こったことについてなど、何でも掛けてもらえるようにしています。以前にも支援したことがある方が、新型コロナウイルス感染症流行の影響で生活に困窮し、再び支援することになったケースがあります。ある男性は、2年ほど前に当法人の支援付き住宅を卒業し、仕事も決まってアパート暮らしをしていました。ところが2020年4月以降に、コロナ禍の影響で勤務先の工場の稼働が一気に落ちて、収入が不安定になりました。同年9月末、アパートの家賃が払えなくなり、退去せざるを得なくなりました。その後もネットカフェで寝泊まりをしながら仕事に出掛けていましたが、少ない勤務時間では再びア

パートに入るだけの資金を確保することもできず、ネットカフェでの生活も限界になり、もう一度当法人と繋がりました。今回のクラウドファンディングで開設した部屋に入居して、仕事を続けることができ、不安定な収入で足りない生活費については生活保護を受給する手続きもできました。2021年3月26日までに、18人の方が今回開設した支援付き住宅を利用しました。仕事をすることも、福祉の制度を利用することも、家(住所)がなければ始まらないというのが現状です。まずは支援付き住居で受け入れることで家(住所)を得られるようにし、それから、ひとりひとりの状況に合わせて、生活の立て直しを支援していきます。

御礼のメッセージ

収まらないコロナ禍で生活にお困りの方が増え、連日、住宅に関する相談や問い合わせを受けるなか、受け入れられる物件・支援体制の確保は大きな課題でした。今回のクラウドファンディングでは、新たな物件の確保のための敷金、礼金などの初期費用や、

家電類の整備に助成金をいただき、15部屋の支援付き住宅を開設することができました。皆さまの温かい善意に心から感謝申し上げます。ご報告とさせていただきます。



理事長 立岡 学

団体の活動紹介



世界は一つの家族である
～まずは身近な仲間から～
見て見ぬふりをしない
～困ったときはお互い様～
行動を起こす
～まずやってみてから考える～

【ワンファミリー仙台のクリーンボランティア530(ゴミゼロ)事業】



①仙台駅に集合し朝7:30出発



②仙台市中心部をゴミ拾い



③ゴール地点で分別



④朝食等を配布し解散

ワンファミリーは、東京の新宿中央公園に起居する路上生活者と一緒に西新宿地区のゴミ拾いの活動をしていた故津田政明氏が2000年に設立した非営利団体です。その津田氏の活動に共感した立岡(現 理事長)と往見(現 副理事長)が2002年2月に仙台でホームレス支援を始めた際、団体名を「ワンファミリー仙台」としてスタートしました。2006年7月に特定非営利活動法人として法人格を取得しています。路上生活者からの「朝食を得ることで一日の生命線が保たれる」という多くの声に答えるために「ワンファミリー仙台クリーンボ

ランティア530(ゴミゼロ)事業から活動がスタートしました。路上生活者等に参加を募り、仙台駅前～仙台市中心部のゴミ拾いをする活動です。社会とのつながりが切れてしまった路上生活者に「自分が世の中の役に立っている」ということを実感してもらい、それが社会復帰の第一歩になればという思いで、今も活動を続けています。2002年4月の開始から2021年3月26日までに累計実施回数は980回となりました。「ワンファミリー」の名前の由来は、津田氏がロサンゼルスに住んでいたとき、日本人の老夫婦オーナーが「世界は一つの家族(ワン

ファミリー)」という理念のもと、世界各国の多人数の方々から格安で部屋を貸していたシェアハウスの名前です。全スタッフが、「世界は一つの家族(ワンファミリー)」という理念のもと、「当事者がどう生きていきたいのか」、「当事者にとっての最善のサポートとは何か」を常に考え、当事者に生きる喜び・働く喜び・つながる喜びを身をもって実感してもらえるよう活動していきます。

支援のお願い

ワンファミリー仙台の活動はみなさまの暖かい心とご支援によって支えられています。一人の力は小さくてもたくさん集まれば大きな力となります。どうかご協力くださいますようお願いいたします。

※食料品のご提供をいただける方は、電話 022-398-9854 またはワンファミリー仙台ホームページのお問い合わせフォームからご連絡ください。ワンファミリー仙台お問い合わせフォームURL: <https://www.onefamily-sendai.jp/contact/index.html>

【郵便振替】

口座記号番号: 02200-8-82849
加入者名:
特定非営利活動法人 ワンファミリー仙台

【食料品】

お米(うるち米/もち米、玄米/精米)、食料品(災害備蓄用食品の入れ替えなど)のご寄付も募集しております。



支援付き住宅 市川の状況

住宅確保数
10室

入居可能数
10室

支援者数
10名

経過報告

「ガンバの会」は、市川市内の路上生活者の支援から始まった団体ですが、最も多い時期で250名ほどの路上生活者は現在25名ほどとなる一方、最近では生活困窮の相談が多くなっています。2020年度、メール等々での相談で対応させていただいているのがおよそ270件、今年はまだ統計が終わっていませんが、昨年の同時期と比べてみると、相談件数が5割ほど増えています。電話やメールの相談は、千葉県だけでなく全国から寄せられます。遠方ですと、相談内容を聞き取りながら、それぞれの地域の団体等や自治体の生活困窮窓口に繋いでいます。直接支援ができる相談者について、今日の「住まい」がない人には「シェルター」を提供するのですが、昨年のシェルターの年間利用者数は57人でした。しかし今年(2020年)は1月の段階で78人になっています。コロナの影響で住まいを失った人の相談が大変多くなっていることを実感します。住まいを失った理由として、雇い止めにより派遣の寮を追い出されてしまった、同様の理由からネットカフェ代も

払えなくなったというケースが最も多く、次にアパート生活をしていただけ、家賃が払えなくなり、住まいを失ってから相談に来られる方も結構おられます。そしてアパートの家賃滞納等が始まって困窮状況に陥っている人。大方のケースで皆さん離職、雇い止めされているという状況です。こうした方々を支えていくために、従来ですと、地域の不動産会社と連携し、アパートへの入居支援を行っていたわけですが、なにぶん時間とお金がかかる。そうした中で、抱樸のクラウドファンディングでアパート10室を、また独自のクラウドファンディングでの10室、合計20室を借り上げ、「住まいの確保」を行いました。市川という首都圏に位置する土地柄、アパート確保はかなり難航しましたが、8月初旬に最初の入居者が、そして今年2月に20人目の入居者が生まれ、現在はサブリースのアパートは満室の状況となりました。入居された方々は、20代から80代と年齢層も幅広く、家具什器も揃った部屋での生活は、相談時とうって変

わって、笑顔がみられるようになりました。入居者の中には、すでに就労に結びついておられる方も数名おられます。しかし一方、一時的にも「住まい」を失い、路上生活も経験し、先の見通しが立たない不安の中で、精神を病んでしまった方がおられ、数名の方は通院治療に専念されている方もおられます。それでも訪問とともに、ご本人も事務所にしばしば来所されて職員と話をされてはちょっとすっきりした顔で帰って行かれる様子に、一日も早い回復を祈っています。新型コロナウイルスは、無差別に人に取りつく可能性を持っていますが、打撃はもっぱら社会的弱者に向かい、この社会を分断していることを、支援を行いながら実感しています。しかしまた、こうした中、この度多くの方々のご支援が背後にあることを感謝しつつ、今後ともこの社会で「小さくされた人たち」と共に歩んでいきたいと思っています。

御礼のメッセージ

今回のクラウドファンディングにより、家具付きですぐに入居できる10室の部屋を確保する事ができました。本当にありがとうございました。また、当団体で独自に実施したクラウドファンディングと併せて合計

20室を確保し、サブリースによる差額などで新しく1名雇用もできました。現在では、すべての部屋は埋まり、コロナ禍における厳しい状況ではありますが、支援体制も強化しながら活動しています。



理事長 副田 一朗

入居者の声

私は、サブリースアパートを紹介して頂き、入居することになりました。当時、身分証等がなかった自分としては、保証人等の観点から個人での賃貸契約が難しいため、非常に助かりました。最初は入居にあたって少なからず不安もありましたが、実際に入居すると内装もしっかりリフォームされていて、とても安心、満足できるものでした。今までがネットカフェ等での生活が大半の時間を占めていたので、日

々の生活を送るのでさえもストレスや不安を抱える毎日でしたが、こうして普通の生活を送れるようになったことは、本当に何気ないことでもとても安心感を与えてくれ、とても感謝しています。現在のコロナ禍の情勢も相まって住居等がなく、そのためなかなか個人では賃貸契約を結べない方も増加しているのではないかと思います。そういった中でサブリース契約によるア

パート入居という方法は自分も含めてですがとても助けられます。何より住居があるということは社会復帰の第一歩に欠かせないと感じました。今回の自分の経緯も合わせてサブリースという方法がもっと広く多くの人に認知されるといいなと思います。(S・H)

団体の活動紹介

24年 1997年から活動	629回 第1・3・5金曜日に夜間パトロールを実施 (2020年5月末現在)
92名 ボランティア登録者数	3,450名 生活困窮者からの相談
10,293,593円 年間寄付額 (2019年度)	523名 シェルター利用者
600名 緊急医療支援/入院支援	48名 就労支援
30名 共同墓地で眠るなかま	650名 アパートへの入居者数



無縁仏にさせず、アパートに入居した居宅者に希望を持ってもらいたいという思いから、ガンバ墓地を設立しました。



交流会や一泊の懇親旅行、サロンの運営を実施し、人との出会い、いきがいつくりを力を入れています。(袋田の滝)



路上生活支援として、食料物資、衣類、医薬品をもって夜間パトロールを実施。(ボランティアによるおにぎりづくり)

1997年11月に市民運動として活動を開始しました。当時は200名ほどの多くの路上生活者が市川にも見受けられ、数名の有志がおにぎりを握って路上生活者のところを訪ねたのが始まりです。何をしたらよいのかわからないまま、とにかく駅や駐輪場、公園などで寝ている方々に声をかけ、話を聞くことから始めました。小さな活動が徐々に市民の方の理解も得て、2003年にNPO法人を取得しました。「住まい」のない方がアパートへ入居できるように2001年からは自立支援住宅運営やアパート入居金の貸付金制度の運営をはじめ、市川市の路上で生活している方々の居宅が少しずつはじまりました。またリーマンショック後の2009年から、派遣切りなどでの生活困窮者の駆け込みみに備えて、シェルター

運営も行い、今やアパート居宅者は650人を数えました。ガンバの会は、路上での出会いからアパート入居後も伴走する支援を続けています。社会から家族から孤立した方々の何でも相談できる相手として支援を心掛けています。アパートでの生活が「孤独」にならないために、定期訪問を中心に必要な支援を行い、交流会や一泊旅行、サロン運営などを通し、人との出会い、生きがい作りを力を入れています。さらに高齢化する居宅者が自宅で安心・快適に暮らせるように訪問介護事業所を運営しています。また障がいという弱さを抱えた人たちも多く、彼らが明るく生活ができるように障害福祉サービス(生活介護・生活訓練事業所が「んば夢工房」(就労継続B型事業所が「んば夢茶房」)を運営しています。さらには、

また貧困の連鎖を止めることを目的に生活困窮家庭の子どもを対象に「んば夢塾」を行い、教育支援だけではなく「居場所づくり」にも力を入れています。ガンバの会の支援は、出会いから途切れることのない関係性に基づく支援であり、それぞれ、居宅者の看取りを行い、葬儀の執行、さらには無縁仏にしないために「なかま墓地」を建立し運営も行っています。私たちは子どもから高齢者まで一人ひとりが笑顔で過ごせるようにと願いつつ、共に歩んでいます。

活動の詳細はこちら



ガンバの会ウェブサイト



支援付き住宅 埼玉の状況

住宅確保数
18室

入居可能数
15室

支援者数
18名

経過報告

2020年10月からこれまでの間、みなさまのご寄付を元に埼玉県所沢市内、東松山市内のアパートを合計18室を新たに借り上げて、現在すでに8室がサブリースによる生活支援付き居住となっています。その他の部屋もシェルター活用しており、2月末までの間に延べ18名の方が部屋を利用されました。

利用者は、コロナの影響で突然職を失い困窮してしまった人をはじめ、ネットカフェから派遣の仕事に通っている人、矯正施設から出たものの行く先がなく困っていた人など、さまざまな事情がありました。ある男性はコロナの影響で自分では天職だと思っていたホテルの仕事の契約更新ができなくなり、精神的、身体的疾患があるので転職も難しく助

けを求めてきました。今は支援付き住宅に住んで生活保護を受け、環境的に安心した状態で心と身体を治すことに専念できています。

地方在住だったある女性は、コロナの影響で地元の派遣の仕事がなくなってしまい、住み込みの仕事を探して故郷から遠い関東北部まできました。しかし職場の状況が最初の話と随分違うため「話が違う」と申し出たところ解雇され、寮を出なければならなくなりました。手持ち金もなく、通りすがりの交番に助けを求めて、サマリアのシェルターにつながりました。生活保護の申請をし、シェルターを経て、今はアパートを借り近所でパートの仕事しながら落ち着いた生活ができるようになりました。

あるシングルマザーの親子は、海外から助けを求めてきました。海外で事業を始めようと準備をしていたところ、コロナの影響ですべてが白紙になってしまっただけでなく、手持ち金も尽きてしまったとのことでした。帰国したくても親族の支援が得られない事情があり、だれかが帰国と帰国後の生活をサポートする必要がありました。昨年末、滞在国がロックダウンとなる寸前に帰国し、帰国後も2週間の隔離生活が必要でした。成田から直接シェルターに入居し、サマリア・市役所・弁護士の連携で生活保護は「代理申請」で申請し、親子が不安なく過ごせるための支援ができました。今は、無事にアパートに引っ越し、お子さんの学校も決まって、希望をもって春を迎えています。

御礼のメッセージ

埼玉県西部地域で10年間以上困窮者支援の活動をしてきましたが、昨年から今年にかけては、今までぎりぎり持ちこたえていた人たちの暮らしをコロナが直撃していると感じるような相談が続きました。また、いつになく女性の相談者が増えてきているのですが、今回の支援で、便利な場所にきれいな部屋を確保することができ、女性の利用者にも安心して心身を休めてもらえています。

みなさまのおかげで、6部屋での活動から、一気に24室にまで増やすことができ、さらに、社会資源が少なく支援が手薄だった県北部にもシェルターを確保することができて本当に感謝しています。ありがとうございました。



黒田 和代

団体の活動紹介



【利用者限定しないシェルター】
必要な人ならだれでも利用できるシェルターです。プライバシーが守られる完全個室で、利用者からは居心地がよいと好評です。



【生活見守り付きアパート】
スタッフの見守りの中、安心して長く暮らせる場所です。



【友の会活動】
シェルターを卒業しても、孤立することがないように、季節の行事やレクリエーションをみんなで楽しんでいます。



【暮らしと住まいの相談窓口】
暮らしの事、病気の事、障がいの事、老後の事・・・なんでも相談できます。電話、Emailだけでなく、LINEでも相談を受け付けています。



【後見サマリア】
成年後見制度の利用が必要と思われるにもかかわらず、複雑な経歴や本人の特性のために候補者の確保が難しい場合に限り、サマリアが「法人後見」を行っています。

特定非営利活動法人サマリアは、2009年から、埼玉県所沢市を拠点として埼玉県西部地域を中心に、生活困窮者への相談支援の活動をしています。所沢市と狭山市、東松山市にシェルターや生活見守り付き住居があります。スタッフの中心に社会福祉の様々な分野で経験を積んだベテランの有資格者が複数います。

「サマリア」という名の由来は、道で倒れていた人を親切に介抱したという、新約聖書「ルカによる福音書」の中の「善きサマリア人」のたとえ話から引用しています。「すべての社会的弱者の良き隣人である」が理念です。

【利用者限定しないシェルター】
シェルターでは、ホームレス、ネットカフェ暮らしの人、矯正施設から出たけれど行き先がない人などの受け入れだけでなく、DV被害等の緊急避難、家族との暮らしに行き詰った人のレスパイトなど、幅広くいろいろなケースに対応しています。また埼玉県弁護士会と連携し、困窮が原因で軽微な犯罪を起こしてしまった人の生活立て直しのための事業にも参加しています。

【生活見守り付きアパート】
生活見守り付きアパートは、様々な理由で一人では生活が心細い方々へ、住まいと生活支援をセットで提供しています。障がいや高齢、依存症の問題がある人が多く利用されています。

【後見サマリア】
「成年後見制度」の利用が必要と思われる人は積極的に制度利用につないでいます。どうしても候補者が見つからない場合は、サマリアが「法人後見」として後見人を引き受けています。

【サマリア友の会】
利用者同士の親睦と、地域での孤立防止を目的に、季節ごとの行事やレクリエーションをみんなで楽しむ機会を設けています。月1回の食事会(現在は休止中)、日帰り旅行(時々1泊旅行)、初もうで、花見、クリスマス忘年カラオケ大会など、皆さん楽しみにしてくださっています。最近、牧場と連携して、定期的な「牧場体験」も行って、皆さんが得意なことで活躍できる場づくりにも取り組んでいます。

一度つながった人たちとは、終わりなくつながり、たとえ一度は途絶えても、いつでも何度でも「お帰り」といってあげられる場所であるよう、今後も息の長い活動をしていきたいと思っています。

今回のご支援、本当にありがとうございます。m(_ _)m。





支援付き住宅 東京の状況

住宅確保数

5室

入居可能数

5室

支援者数

5名

経過報告

〈もやい〉では、2001年より住まいがない方のアパート契約の際の「連帯保証人」の引き受けをスタートし、2018年には認定NPO法人で全国初の「宅建免許」を取得するなど、これまで、住まいの貧困の問題に取り組んでまいりました。一方で、シェルターや、無料低額宿泊所などの一時的な宿泊、滞在先の提供は、これまで、おこなってきませんでした。その要因としては、都内では住宅市場の相場が高く、低廉な家賃で良質な物件を確保することが困難なことがありました。一般的に、サブリース(転賃)をおこなう場合、借りる家賃分の金額以下の値段でご本人にお貸しすると赤字になってしまうので、事業の継続性に課題がうまれてしまいます。そういった背景もあり、都内では、住まいのない生活困窮者や生活保護利用者の宿泊先として、複数人部屋の施設や宿泊先が多くな

ってしまうという課題がありました。〈もやい〉では、こういった現状を変えていくためにも、複数人部屋の施設や、個室であってもトイレやお風呂が共同などの環境ではなく、完全に独立したアパート型のシェルターが必要だと考えています。コロナ禍で、収入減や失業により住まいを失う方が増加する一方で、感染症対策の必要性も高まるなか、抱樸と協働し、アパート型シェルター(支援付住宅)の設置を決め、準備を進めてまいりました。物件を探すのに苦労し、スタートに時間がかかりましたが、設置してすぐにお一人目の方の入居が決まりました。まだ、〈もやい〉のアパート型シェルターの試みは始まったばかりですが、コロナ禍で困窮し、住まいを失ってしまった方への受け皿となれるように、しっかり取り組んでいきたいと考えています。また、抱樸やほかの協働団体

とも協力しながら、コロナを契機とした「ニューノーマル」として、住まいのない人が、劣悪な環境の宿泊先ではなく、支援付住宅やアパート型シェルターにあたりまえのように入居できるように、政策提言等を続けていきたいと思っています。



御礼のメッセージ

コロナ禍で生活が苦しい方が増加するなか、多くの方がクラウドファンディングによるご寄付や活動の支援をしてくださり、心より感謝申し上げます。

〈もやい〉も抱樸と協働し、アパート型のシェルター(支援付住宅)の試みを始めました。

相談支援のみならず、引き続き、住まいの貧困の問題に取り組んでいきます。引き続き、みなさまからのご支援、ご協力を賜りますよう、よろしくお願いいたします。



もやい理事長 大西 連

団体の活動紹介



河野太郎行革大臣も視察&ボランティアとして、食料品の配布に参加しました。2021年にはいってからは毎週270人に提供しています。



現在、毎週土曜日に新宿都庁下にて相談会と食料品配布をおこなっています。



コロナ禍での支援施策について山本厚労副大臣に要望をしました。



現在、アパート型シェルターを抱樸との協働で5部屋、休眠預金活用事業として4部屋設置し、運用しています。

〈もやい〉は2001年に、「日本の貧困問題を社会的に解決する」をミッションに設立した団体です。

これまでに、住まいのない方がアパート入居の際の「連帯保証人」をのべて約2400世帯お引き受けしたり、同じく約800世帯に緊急連絡先の提供をおこなっています。また、2018年には認定NPO法人で初めて「宅建免許」を取得し、住まい探しの支援もおこなっています。

生活困窮者への相談支援は、面談、電話、メールなどで、このコロナ禍では10000件近くお受けするなど、文字通り、生活困窮者へのワンストップの総合相談として、首都圏近郊のみならず全国から寄せられるSOSの声にお応えしています。コロナ禍では、これまでの活動にプラスして、現在、毎週土曜日に新宿都庁下において、食料品配布と相談会の活動もはじめました。

食料品を求めて訪れる方は、2020年4月は120人程だったのが、2021年になってからは200人をこえ、3月に初めて300人以上となりました。食料品配布と同じくおこなわれる相談会も毎週40人以上の方から相談があります。

特に非正規で働いていた人などを中心に、コロナ禍では多くの方が失業し、収入が減

少し、生活に困っている状況が浮き彫りとなっています。

2020年3月に稲津厚労副大臣に要望書をお渡ししたのを皮切りに、生活困窮者への支援施策の拡充を求めて、政策提言活動にも力を入れています。与野党を問わず、国会議員の視察やヒアリングに協力し、このコロナ禍で必要な公的支援が確保されること、より拡充されることを目指して、日夜、活動しております。

こちらは、政策として実現し成果が出たものと、まだまだ不十分なものがありますが、引き続き、現場の声を社会に、政治に発信していくことを続けていきます。

そして、失業や収入減などといった「緊急支援」と同様に、「孤立」の問題にも直面しています。

これまで「連帯保証人」や「緊急連絡先」をお引き受けし、地域のなかでの生活を支援していた方のなかで、感染予防の観点から通っていたデイサービスやデイケアが閉鎖になった、頻度が減って家にひきこもることが多くなった、などの声が多く寄せられるようになりました。

感染リスクへの不安で外出を控えるようになった方や、精神的な不安が強くなってしまった方もいます。

目に見えない形でもコロナの負の影響というのは、じわじわと私たちの周囲に及んでいると感じています。

コロナ禍も1年をこえ、長期戦となりつつあります。生活の困窮と社会的孤立、その双方の視点で必要な支援をどう整えていくことができるのか、また、民間のNPO等の共助的な取り組みのみならず、公的支援をどのように拡充することができるのか、大きな課題となっています。

〈もやい〉は、今後も、生活に困窮した人や地域のなかで孤立してしまった人への支援をおこなっていきます。先が見えない状況ですが、多くの方のご支援、ご協力を、よろしく申し上げます。

〈もやい〉の活動をチェックしてもらえますようお願いいたします。

活動の詳細はこちら

もやいウェブサイト





支援付き住宅 愛知の状況

住宅確保数
18室

入居可能数
18室

支援者数
10名

経過報告

名古屋では、2019年より生活困窮者向けの緊急一時生活支援事業が始まり、当会と別団体の2団体で名古屋市の支援を受けて行ってきました。ここは、当会他3団体が運営する名古屋市仕事・暮らし自立サポートセンター大曾根の支援によって運営されています。しかし、名古屋市の規定で、短期間で住居の確保が可能な人の一時的居住という限定が強くあり、自由にはできません。2020年6月には、名古屋市の支援付セーフティネット住宅を3戸引き受けることができました。この制度では、

家賃の月額4万円補助や債務保証料の補助の仕組みがあり、生活に困っている方が、より優良な住居に入居できる制度がありますが、人的支援が特についているわけではありません。2020年夏には、特定非営利活動法人抱樸より、クラウドファンディングを実施し、全国10か所で支援付住宅を拡大していきたいとの申し出がありました。そこで、これを大変ありがたい申し出として、喜んで引き受けるとして、9月15日に15戸を目標として取り組むことを覚書契約として、抱樸と当会の間で締結することとなりました。

早速、適切な物件がないかと、あちこち打診したところ、幸い名古屋市中心部のマンション36室の中の18室空いている物件が見つかり、名古屋市の不動産会社を通じて大家さんと交渉した所、この物件を管理していた東京の会社から、名古屋の不動産会社に管理を移すことが可能となったことで、大家さんからの了承が得られ、12月ようやく契約を締結することができました。

入居者の声

コロナの影響で派遣切りとなり、寮を追い出されてしまったことになりました。知合いの家に居候をして凌ぎながら、色々相談していたところ、今回のお部屋に入居できるようになりました。収入がなく、初期費用も

出せない、保証会社も全く通らないと不安で体調もすぐれませんでした。本当に安心してます。(Jさん)

御礼のメッセージ

突然の「抱樸」さんからの連絡で、皆さんからの多額の寄付があったことに驚いています。そんなみなさんのお陰様で、今回名古屋においても支援付住宅の確保を一気に進めることができました。わたし達は障害のある人と共に生きる街をめざして50年活動してきました。しかし、近年住まいに困る人が急激に増えてきています。それで、当会としても居住支援の取組みにこの3年力を入れてきました。

この1年コロナ感染拡大の中で、生活に困り、住まいに困る人の相談はすさまじく増えています。その人達への支援を行うためには、もっと多くの力が必要となってきます。この厳しい時代を乗り切っていくために、今回の御支援を有効に活かしていきたいと考えます。本当にありがとうございました。



代表 高藤 賢三

団体の活動紹介

1971年、障害のある人を山の中に隔離する施設はおかしい。障害者への差別をなくし、地域社会の中で、障害のある人ない人が共に生き働く社会をつくらうと「わっばの会」が始まる。実際に、共に生活する「生活共同体」、共に働く「共働事業所」をつくり始める。

2010年代から、障害のある人だけでなく、地域の中の生活や仕事に困っている人々と共に生き働くことができるよう、活動・事業の幅を広げる。

1984年、下請け作業からの脱却をめざし、当時はまだ珍しかった無添加・国産小麦のパン「わっばん」を全国に先駆けてつくり始めた。そのことで、障害者の仕事が増え、障害者の経済的自立への道が開き始める。

2015年、仕事・暮らし自立サポートセンター大曾根を他の2団体と共同で名古屋市から受託し、生活困窮者への相談支援活動を開始。失業、高齢、障害、病気、ひとり親、外国人、刑余者など複合的な課題を背負った人々の相談が増え続けている。

1993年、障害ある人が様々な会社や団体で働けるような就労援助活動や障害のある人が地域の中で自立して生活できるよう、介助派遣などの生活援助活動を自主的に始める。

2018年、居住支援法人の指定を受け、高齢者、障害者、低所得者、子育て世帯など様々な人々への居住支援の取組みを始める。名古屋市内の団地内に地域総合交流拠点「ソーネおおそね」を開設する。(広さ1,000m²)

2000年代から、わっばの会の「共同生活体」「共働事業所」「就労援助」「生活援助」の拠点が増え続け、多くの障害のある人への生活・労働に関わる活動・事業が広がっていく。

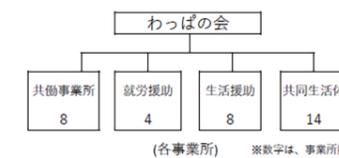


【ソーネそうだん】「地域の駆け込み寺」として、小さなお困り事から専門家が寄り添って解決。

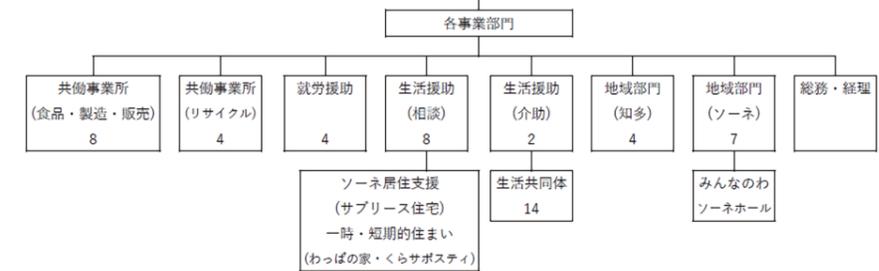
【ソーネしげん】分別してお持ち頂く「資源」を買い取ります。買取時は店内カフェに使えるポイント交換がお得。

【別紙】 わっばの会の全体像

<現行> 1990年代半ばから現在に至るまで



<これから> 2021年～



<会の目的> 2011年(わっば40周年)～
「差別や社会的排除をなくし、共に働き、共にくらす地域社会をつくる」
①障害者への差別は変わらず存しているが、社会の中の競争と格差の深化によって様々な新しい社会的排除の問題が生まれ、それらの総合的な解決が求められています。
②そのための共働の実現に向けて障害者だけでなく様々な社会的排除を受けている人々、職のない人々も参加する「社会的事業所」づくりを進めていく必要があります。
③社会的事業所や共同生活体づくりにとどまらず、働く場をひろげる一般就労援助活動や地域社会の中でくらすを支える住宅・介助・移動・所得・社会参加活動などの総合的生活保障体制を進めることで、地域の中で共に生き働くことの実現をめざします。それによって高齢者障害者も共に生きる社会の一員としての参加が保障されています。

支援付き住宅 大阪の状況

住宅確保数	入居可能数	支援者数
22室	22室	16名

経過報告

新型コロナウイルスの第一波に対して実施された緊急事態宣言を受けて、大阪では4月にネットカフェが営業中止することになりました。安定した住まいを持たずに生活している方々が一時に寝場所を失ってしまうことを防ぐために、大阪で活動している22のホームレス支援団体が協働して、「新型コロナウイルス住まいとくらし緊急サポートプロジェクトOSAKA」を立ち上げ、緊急相談会を12回実施、短期間のホテル宿泊を提供して、生活保護の活用や就職への支援を行いました。

このプロジェクトを通して、短期間の宿泊で次の派遣会社等の寮に入ることができた人が意外に多いこと、また生活保護へ進む場合も個室での一時宿泊の仕組みがあると安心や信頼の基となることがわかりました。その反面で、建設や派遣会社等での寮付きの仕事をご希望していない人(ずっと寮生活で年を重ねているこのまま

では先行きが非常に不安という思いを持たれている方が多い)、就職先が既に決まっているが住まいが安定しない人、就職には一定の支援が必要と考えられるが生活保護を希望しない人への支援をどのようにすべきかという課題が、浮かび上がってきました。

そこで、今回のご寄付を活用して、まず10室をサブリースで確保、支援付き住宅として生活保護制度の活用も含め必要な方の入居を進めるとともに、生活保護を活用せずに仕事での自立をめざす方には、さらに別のクラウドファンディングを活用し4か月間の家賃・交通費・就労時の昼食代等の支援を行うこととし、就労型居住支援を選択できるようにしました。ホームレス状態での生活を余儀なくされた人たちにとって、多様な選択肢があることがたいへん重要です。

コロナ第三波の年越しの時期を経て、

簡易宿所やホテルでの宿泊をしつよい生活が立ち行かなくなった人たちの相談が増え、10室では足りなくなってしまうため、今回のご寄付を活用させていただきまして2月までに22室を確保することができました。

就労で外国から来られている方が多い地域の特徴もあり、帰国支援や難民申請のために2人の方が支援付き住宅を活用しています。いかなる事情であっても安定した住まいの確保は、人の暮らしにとって必要不可欠ですので、多様な選択肢を作りつつさまざまな事情を持つ方に伴走できる総合的居住支援に今後も取り組んでいきます。3月現在で支援付き住宅に入居された方のうち5人が就職、1人が就職決定となっています。

入居者の声

保証人を立てられないため、部屋探しはあきらめて、住み込みの仕事ばかり探してました。住み込みの仕事を見つけてもコロナの影響で仕事なくなると住むところもなくなりました。やっと自分の部屋に住めるよう

になり、仕事探しの幅が増えました。おかげさまで、スーパーでの就職が決まり、職場の環境も安定しているかんじなので、ほっと一息つくことができました。



地域のこどもたちのためにビザ製作のボランティア



入居してすぐに落ち着いた生活へ

御礼のメッセージ

抱樸のクラウドファンディングで集まったご寄付のうち560万円を拠出していただき、居住支援を始めることにしました。コロナ禍でいろんな方が緊急的に駆けこまれて、相談を受け住居を提供しました。20代前半から50代の方の緊急支援をしてきました。当初10室という予定だったのですけれども、10室では足りない

ということになり、思い切って22室を借りていきました。現在15人の方を支援しています。さまざまに困難を抱えている方も多いですが、仕事をご希望の方には別のクラウドファンディングでいただいたご寄付を活用しつつ就労支援をしています。本当にこういった取組みがあったことで、緊急的に住まいをご支援する

ことができました。心より御礼申し上げます。まだまだコロナ禍が続く状況でありますので、必要としている方にぐっと手を差し伸べて、安心できる住居とお仕事の確保に向けた継続的な支援に取り組んでいきたいと思っておりますので今後ともよろしくお願いたします。



山田 寛

団体の活動紹介



協力企業との出会いの場お仕事マッチ



ホームレス状態の方が、保健・医療につながる支援



生活の安定をめざしてともに進む伴走型支援



炊き出しやシェルターなど命をつなぐ支援



高齢のホームレス状態で生活する方に働く機会を作ります



抱樸の奥田理事長が、シェルターでのマスク配布にかけつけてくれました。



もういちど人とのつながりの中で生きていく釜ヶ崎夏祭り慰霊祭

社会とのつながりを回復する就労型居住支援



①サブリースの活用で、入居のハードルが一瞬と下がりました!

再び住まいの契約をする際の礼金・家賃の前払いや保証会社の審査パスなどの難関をクリアできました。

②第二弾のクラウドファンディング(#ほっとかへんで大阪)へのご寄付を併用することで、就労支援の新しいモデルとなる給付にチャレンジしました!

就職決定時の交通費や昼食代等の支援、場合によって携帯の維持の支援も行うことで就職への準備期間を短縮することに成功しています。



支援付き住宅 兵庫県・大阪府の状況

住宅確保数	入居可能数	支援者数
29室	17室	10名

経過報告

皆様からのクラウドファンディングでのご寄附をいただき、誠にありがとうございました。私たちは、以前より見守り型、生活支援付き住宅を模索・計画しておりましたが、中々理想とする住居と資金の問題で進みませんでした。しかし、コロナ緊急支援としてのクラウドファンディングで皆様のご支援を頂くことで進める事ができました。皆様の思いを感じながら、鼓舞・集中し、ありとあらゆるお部屋を見て、支援すべき方々のそこの生活をイメージし、此処なら!という居住環境を見つけ出し、スタートしました。

ただ、実際に生活支援付き住宅をスタートするにあたり大変だった事は、まず、賃貸物件をサブリースを目的に契約する場合でも保証会社が必要で、ほとんどの保証会社がサブリースに対する保証業務を行ってなく申し込みすらできないケースで物件確保が困難を極めました。また、なんとか部屋を確保した後でも、家財電気製品調達もコロナ禍の影響もあり、製造調整

と即時に納品がかなわず(配送員減)、契約後も入居可能には期間を要しました(借家人賠償保険・鍵交換・エアコン・ガス台あるいは電磁調理器具・照明・冷蔵庫・洗濯機・ベッド台・布団一式・電子レンジ・ケトル・レンジ台・カーテン等)。そしてようやく入居可能になって、即時に対応すべく各役所・機関にアナウンスしますが、やはりコロナ禍で、ありとあらゆるケースで(役所ですら)人員配置調整がおきて、困っている方に即応したくとも意外なところで時間を要しました。私たちは、元々アウトリーチ活動を行っており、自治体の各支援部局と連携しておりますが、対象自治体の相談窓口が頻りに伺い、支援付き住宅の支援理念や利用者像と見込める効果をご説明しました。当初は自治体の担当者も掴みずらさもありましたが、相談ケースを相互に検討しながら対象者本人も交え、最初は試行錯誤、ただ、いざ一人目の入居に向け進み始めると、早々に相談が続き入居に至りました。他の対象地の自治体も同様

です。大阪府内(大阪市外)の住居は申し込み後の改装で現在契約を進めており、契約後には上記同様に家具什器備品を整えてまいります。単身男性が多いですが、親子ケースの相談では、賃貸に住んでいた親は癌治療、息子さんコロナで就労がなくなり途方に暮れて相談、生活困窮相談窓口より当法人に連絡があり、3者で話し合いその後生活保護申請。賃貸していたマンションは家賃が高いため解約。親は癌療養施設に入所し、息さんが単身入居。支援をし始めて入居後10日で面接にも行き、数日後にはその会社で就労開始となりました。ただすぐにご不幸があり、心の整理から新年より仕事を再開。訪問時には仕事の量もコロナ禍で勤務日数の調整が出てきていると相談がありました。まだまだ、抱えている問題があり支援は続いております。

御礼のメッセージ

今回兵庫県内で進めてきた支援の過程を大阪府内の自治体とお話でき、コロナ禍での支援の在り方の一つとして是非協働して進め参りましようとなりました。特定非営利活動法人抱樸さんの主催された今回のクラウドファンディングのプロジェクトに参画させていただき、皆様

から頂いたご寄附や思いにお応えできるよう、是が非でも入居された方々が一歩足を進めれるように頑張ります。皆様、本当にありがとうございました。



理事長 小林 真

入居者の声

年金を頂きながら、運転手として仕事しております。コロナで出勤調整があり社宅に住んでおりましたが、会社がコロナの影響で社宅を整理する事にしたため、出て行かねばならず

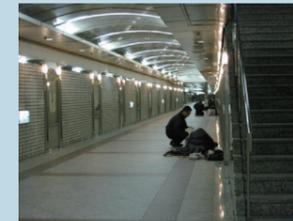
役所に相談して今回、お世話になる事にしました。その話を同僚にしたところ、同僚2人もお世話になりたいとなり、同じく年金を貰うような歳なので審査も通らず、また新たに家電

やら揃えるお金もないし、相談ができるところがあってホッとしています。とお話を伺いました。ありがとうございます。

団体の活動紹介



関連法人と訪問・相談活動を実施しております。



介護保険制度に乗らない介護ポーターの方用に無償貸し出ししています。



介護保険請求せずに入退院・通院支援を行っております。

近畿圏にて当初は有料老人ホームではなく、生活支援ハウスとして始めました。地域での生活でこの生活支援ハウスは、自治体からこんな施設を作れないだろうか?から、後に運営理念は変えずに根拠法にて監督・監査できる有料老人ホームに移行しました。主に介護ポーター層を受け入れる有料老人ホームとして困窮層に対応する利用料金体系で、また介護保険を利用できない方々には、利用料金内で生活支援を行い地域で生活困窮されている方々を対象に運営してまいりました。設立当初から生活力の困窮されている方を対象に受け入れる、他にも若年性でのポーター層、母子困窮、入退院を繰り返されている

方、一時保護など多岐にわたる地域の要望に応じる運営方針で今に至っております。例えば、入退院を繰り返すなどで入居されたのちにADLの改善などで、一般的な住居に移られる場合、転居支援も行い、その後も必要な定期的あるいは随時の見守りや支援は続ける活動をしております。当初より、包括的な見守りであったり、支援があれば一般住宅で暮らせる方々に対する事業を模索してまいりました。自らの法人では介護保険請求事業はせず、介護が必要な方々には地域の介護事業者に入ってもらい(複数事業者に)互いに手を抜けない切磋琢磨な状況と利用者が選択できる余

地を取っています。そして、介護保険の点数利用では不足の部分を家族的サービスとして当方で担っております。利用料が低額ですので、なかなか他の事業に参画できない中、コロナ禍を起因とする事業ですが、複合的な生活困窮に対する事業にチャレンジできることは、光栄であり改めて身の引き締まる思いでございます。



支援付き住宅 岡山の状況

住宅確保数

20室

入居可能数

--室

支援者数

--名

経過報告

当法人では、2015年より岡山市の委託を受け、生活困窮者自立支援法に基づく一時生活支援施設を運営しています。定員は19名で、年間約100名の住まいを失った方の受け入れ、次の住まいを探すお手伝いをしてきました。失業して住まいを失った方だけでなく、社会的養護の中で育った十代の若者、年金生活がままならない中で病気を抱えた高齢者、頼れる人がおらず孤立した妊婦、自身の抱える障害に気づかないまま行き詰ってしまう方など、実に多様で複雑な困難を抱えておられました。19名という定員は充分ではなく、入所を断らなければならないことも多々あり、意を決して相談くださった方のその後を祈るしかない状況も多くありました。そして、コロナ禍で住まいを失った方、また、失う寸前にある方の増加から、その状

況はさらに強いものとなっていきました。そうした現状と、短期間での自立を迫られる一時生活支援施設の限界が明らかになってきたことが相まって、当法人でも生活支援付き住宅の必要性を強く感じ始めていました。不動産会社のご協力のもと、20室を有する適当な物件を探し当てたことと、今回のパートナー団体としてのお声がけをいただき、その計画は本格始動することとなりました。いただいたご寄付で、大規模な改装や物品購入を行わせていただいたのと並行して、町内会説明会や、町内全戸への説明文の配布、近隣小・中学校へのご挨拶、建物に隣接した住民へのご挨拶を行い、開設に向けて地域の理解を得る努力を積み重ねてきました。

そんな中、一部の住民の方より開設反対の声が挙げられたため、住民理解を得るための作業はより丁寧に、時間を費やしておこなってきました。そのため、残念ながら3月末の時点では、開設には至っておりませんでした。なかなか開設に至ることが出来ない状況に、焦りや、くじけそうになることもありましたが、一方で、この物件確保の必要性を理解し、応援してくださる方が実はたくさんいるということもわかりました。そうした方々からの声を励みに、5月現在、ようやく一定の住民理解を得ることができ、あとは開設を待つのみ、という段階まで到達することができました。

メッセージ

今回、クラウドファンディングにご寄付をしてくださった皆さまに、本来あるべきご報告ができない状況にあること、心より申し訳なく思っております。乗り越えな

ればならないことはたくさんありますが、私たちきずなは、このプロジェクトの歩みを止めるわけにはいきません。みんなが幸せになる、誰も不幸にならないこのプロジ

ェクトを成し遂げることができるよう、どうか今後とも皆さまのお力添えを、よろしくお願い申し上げます。

団体の活動紹介



安楽亭



安楽亭内で、思い思いの時間を過ごしなが
ら、ボランティアさんが作った食事をゆっ
くりとります。



毎週水曜日23時半より岡山駅周辺を巡回し、
軽食や薬、冬期は寝袋やカイロの提供をおこ
なっています。



中四国で唯一、現在もビッグイシ
ューを販売しています。



2019年より「安楽亭農園」を開始。当事
者やひびき入所者・卒業生などと一緒に
野菜を作り、商品化しています。

当法人は、2002年に任意団体「岡山・野宿生活者の冬を支える会」を発足し、その歩みを始めました。そして、2011年にNPO法人化し、「岡山・ホームレス支援きずな」として、その活動を広げてきました。その中で、「安楽亭」という炊き出し拠点を用意し、屋外ではなく室内で、みんなで食卓を囲んで、温かい食事をおしゃべりしながらゆっくりと、ということを始めました。シャワーや洗濯もできます。「安楽亭」という名前は、山本周五郎の小説『深川安楽亭』に由来しています。さまざまな事情を抱えたさまざまな人々が集まるその場所。まさにその通りでした。おしゃべりをするその中で、その方の歩んでこられた歴史を感じ、これからの人生のなにをお手伝いできるのか一緒に考える。その繰り返し、積み重ねでした。その延長線上に、2015年には岡山市一時生活支援施設ひびきを開始。そして、刑余者支援のための自立準備ホームなごみも開始しました。一度はホームレス状態となった方々が、再び地域の中で暮らせるようになるためのお手伝いをさせてもらいま

た。その数は、1000人を超えます。複雑すぎる困難に途方に暮れそうになることもありますが、私たちにできることはあくまでも、その方が自らの人生を自らのあしで歩めるようになる、そのサポートに過ぎません。その方のもつ力を信じて、時間をかけて一緒に歩む。伴走型支援でした。2021年が始まりまだ3ヶ月ですが、すでに2名のひびきとなごみの卒業生が亡くなりました。1名は80代男性。病気を抱えながらホームレス状態となり、それでも居宅生活を望み、単身生活が始まって1か月後のことでした。急な容態悪化とコロナ禍から、看取することも、見送ることもできませんでした。もう1名は50代男性。孤独死でした。病気を抱えながら、生活保護で単身生活を送っていましたが、年明けに訪れた不動産担当者により発見されました。片付けをしたその部屋の壁には、12月と1月のカレンダーが並んで掛けられており、まだまだ生きようとしていたことが感じられ、私たちにできることは無かったのか、胸を締めつけられる思いでした。

さらに、1名の50代男性が、独りでの生活に行き詰まりを感じ、自ら命を絶とうとしていたところを発見されました。私たちは何をしてきたのか。地域へと送り出した方々に、本当に伴走できていたのか。コロナ禍で多くの方が孤立する社会となってしまう今、私たちきずなは、この無料低額宿泊所開設への課題に向き合うとともに、自らの活動をいまいちど振り返り、原点に立ち返るときなのではないか、と感じています。

活動の詳細はこちら

きずなウェブサイト



支援付き住宅 北九州の状況

住宅確保数
25室

入居可能数
25室

支援者数
20名

経過報告

北九州では、2018年3月より、小倉北区にてサブリースによる生活支援付き住宅を開始していました。当初予定した46室が満室に近づいていた4月にコロナ緊急支援として、クラウドファンディングを開始、その事業に対する村上財団からの先行寄付を基に、追加で25室を準備し、7月より受け入れを開始しました。コロナの影響等により、仕事や住居を失い、あるいは転居せざるを得なくなった方々を中心に、2月末までに20名の方が利用されました。(うち3名は次に行き先が決まり、現入居者は17名)。10代から70代まで、様々な年代の方が入居されています。

ある男性は、やっと就職した先(タクシー会社)で仕事を始めたところコロナで減収になり、保証会社の審査が通らない状態に。支援付き住宅がなければ、ホームレスになるしかないと追いつめられていました。また、親族と同居していたシングルマザー(子どもは1歳)は、働いていた親族の収入がコロナで激減、しかし収入ゼロではないので生活保護も受けられず、子ども家庭相談室へ相談の結果「世帯分離」して、母子だけ生活保護を申請し、抱樸の支援付き住宅で生活をリスタートさせられたらベスト、ということになりました。家族と離れて一人で子育てするのは厳

しく辛いことですが、支援付き住宅管理人と抱樸スタッフが、支援を行うことで、アルバイト就労、保育所通園を果たし、4月からは通信制の高校への進学を予定しています。多くの方が、落ち着いて暮らすことの喜びを感じられています。もちろん、今後、良いことだけでなく、新たな課題も出てくるかもしれませんが、日常적인見守りと生活、就労などの支援を行いながら、入居者の方に伴走していきます。

入居者の声

支援付き住宅に入ってから良いことばかりです。まさか、こんなふうになれるとは思っていませんでした。ここに入る前はきついことばかりでした。子どもを抱え、住所もない状態になっていました。今までは、どうせ誰かに話し

ても、聞いてはくれても何もしてもらえなかったが、今はサポートしてもらえます。お金を計画的に使えるようサポートしてもらえたり、役所や手続き等わからないことは一緒にしてもらえます。まさか今から高校に行けるよにな

るなんて…夢のまた夢だったこと。いつでも相談できて本当にありがたいです。

御礼のメッセージ

クラウドファンディング終了から約8ヶ月。今日までに、25室の支援付住居を確保し、20人の方をお受け入れることができました。各地のパートナー団体とも連携させていただき、これだけスピーディーに支援事業を進めることができたのは、皆さまからお預かりしたご寄付のおかげです。

世界中の誰もが当事者となったコロナ禍では、ご自身も様々なご不便やご苦労があったことと思います。その中で「困っている誰か」へと心を寄せてくださいましたこと、抱樸関係者一同、本当に励まされました。改めて、心から感謝申し上げます。



理事長 奥田 知志

団体の活動紹介



みなさまのご支援をお願いいたします
工藤會本部跡地をこども若者を含む全世代を対象とした地域共生社会の拠点として再生させるプロジェクト。



雪の中での炊き出し(Twitterより)。12月から2月は毎週、3月からは隔週金曜日に、お弁当や衣類、薬など配っています。

1988年12月、私達は路上に生きる人々を訪ね夜の町を歩き始めました。数名のボランティアがおにぎりを携え路上の人々を訪ねます。「何ができるのか」、「何をすべきなのか」、手探りの活動が始まりました。訪ね歩き、傍らに座りひたすら耳を傾けました。一言も漏らさないようにメモを取り続けました。なすべきことは、その中にありました。時には「来るな」と叱られることもありましたが、「その時」が来るのを信じて待ちました。

2000年、私達はNPO法人となりました。その日、「一日も早い解散を目指します」と宣言しました。こんな活動が必要ない社会を創ることを目標にしたのです。私達が掲げたミッション(使命)は、「ひとりの路上死も出さない」「ひとりでも多く、一日でも早く、路上からの脱出を」「ホームレスを生まない社会を創造する」でした。

孤立が広がる時代において「ひとりにしない」こと、「断らない」こと、そして「つながり続ける」ことが抱樸の基本姿勢となりました。制度の枠に縛られることなく「ひとりとの出会い」から必要な仕組みを作りました。そのような「制度に囚われない活動」は、

「人を属性で見ない」という在り方を生みました。そもそも「ホームレスと言う人」はいません。例えば山田さん、田中さんという名前のある個人との出会いからすべてが始まり、私達は「出会った責任」を考え続けました。活動は自立支援に留まらず、「出会いから看取りまで」、「人生そのものに伴走する」というスタイルとなりました。

活動開始から25年を経ての2014年、私達は名称を「抱樸(ほうぼく)」としました。山から切り出された原木・荒木(樸)をそのまま抱き止めることを意味するこの名称は、「自己責任」など、「断る理由」が横行する日本社会に対する「対抗文化」を意味します。すでに、日本の貧困と格差は常態化しています。私達は、「解散できない」ことを悟り、「解散しない」ことを決意しました。

私達が目指すのは「抱樸する社会」です。「断る理由を断念した社会」です。路上生活者の支援から始まった活動は、困窮し傷ついた家族、泣くことさえできない子どもたち、さらに孤立する人々、仕事を失った人、生きづらさを抱える人々、罪を犯した人々、障害のある人、高齢の方々、住宅確保困難者支援に広がりました。現在実施している



コロナ影響で相談支援件数は前年4倍の月も。



出会いから看取りまで人生を伴走する。互助会葬。



自立された方々もボランティアで地域清掃活動に参加。

事業は27となりました。すべては「出会った責任」を果たすためでした。

私達が目指すのは「伴走型支援」です。従来の問題解決型の支援に加え、たとえ解決できなくても「つながり続ける」ことを大事にします。「伴走」が社会の前提となることで、私達は「助けて」と言うことが出来ます。抱樸が目指すのは「助けてと言える社会」です。

どうか、この活動にご支援いただきたいと思います。

活動の詳細はこちら

抱樸ウェブサイト



抱樸YouTube



発行日：2021年6月1日

発行元：NPO法人 抱樸

〒805-0015

福岡県北九州市八幡東区荒生田2-1-32

TEL 093-653-0779

FAX 093-653-0779

E-mail npo@houboku.net